伊賀上野の多言語・多方言の言語景観

ダニエル・ロング・今村　圭介

三重県の伊賀上野地域（旧上野市を中心とする現在の伊賀市）は言語景観の観点からみて興味深い地域である。ロング（2011a）が報告したように、伊賀上野は地域方言と外国語の両方の看板が目立つ地方都市である。すなわち、一方では観光地であり、方言が文化的観光資源として活用される地域である。地域特有の伝統方言が見られるほか、町の位置関係によって京都弁などの近内諸方言と名古屋弁に代表される中部方言の両方が進出しているのである。他方では、外国人住民の集中地域であり、ポルトガル語、スペイン語、タイ語、英語、中国語などの多言語表示もよく見かける。本稿は、伊賀上野地域の言語景観を方言、多言語の観点から考察し、他地域との比較を通し、その特徴や背景にある社会言語学要因を明らかにすることにより、伊賀上野の言語景観がどのようにそこの言語環境に関与しているかを探る。

1.　方言看板としての多言語景観

伊賀上野には観光客が多く訪れるので、全国各地で見られるように、地域言語（地元方言）が文化的観光資源として活用されている面が見られる。図１と図２は観光案内所ともなっているシルバー人材センターで見た「おいでなして」（いらっしゃい）と「またきてだーこ」（また来てください）である。

図 2 を図 3 の「見に来てだーこ一や」と比べると、「こ」が長音化するか否と、文末詞の「や」が使用されるかどうかという興味深い方言内変異が見えてくる。ロング（2011a）では「だーこ」を使った 5 枚の看板を取り上げたが、その中にも「どうぞ一服してだあこや」のように、文末詞の「や」が付いた看板が含まれていた。

図 4 は買い物袋の持参を促進する行政のポスターで「持ってだぁ～こ　マイバック」（持ってください）と書かれている。この小さい「ぁ」は意味のない表記の違いだけなのか、それとも作成者が何らかの発音の特徴（アクセントの上がり下がり？）を表そうとしていたかは不明だが、これも変異である。

ロング（2011a）で取り上げた 5 枚と本稿の 3 枚を合わせると合計 8 枚になるが、その内の 5 枚は「来てだーこ」のように動詞「来る」に付いている。これに関して住民に尋ねると「日常会話からこの『だーこ』の使用が減っているように感じる」という印象を持っている。これは大阪から移住して来た伊賀上野住民を対象にしたインフォ

ーマルな聞き取り調査（2010 年 12 月 5 日）、および地元出身者を対象にした富山大学中井ゼミの方言調査（2011 年 6 月 18 日）の際に得られた情報である。「だーこ」は歴史的には「～て頂く」に由来する、尊敬を表す待遇表現であるため、本来は様々な動詞に付くことが可能なはずであった。現に 8 枚の看板のうち「使うてだーこ」と「一服してだあこや」、「持ってだぁ～こ」のように「来る」以外の動詞と共起しているのが 3 例あったので、「来てだーこ」が完全に定型化しているとは言えないが、実際の使用頻度が減る一方、このような看板での使用が増えているのであれば、定型化する傾向が見られてもおかしくない。いずれにしても、沖縄の「めんそーれ」や奄美の「いもーれ」、八丈島の「おじゃりやれ」といった歓迎表現にも定型化の傾向が見られる（ロング 2009, 2010a）。

さて、伊賀上野は地理的には近畿と名古屋との間に位置するが、言語的に関西方言に位置づけられる。それでも名古屋方言が進出していることもある。例えば、町の至るところに缶コーヒー自販機に書かれている「でらうまいコーヒー」が目に付く。「でら」は「非常に」に当たる程度副詞である。

図1. 「おいでなして」

図2. 「またきてだーこ」

図3. 「見に来てだ～こ～や」

図4. 「持ってだぁ～こマイバック」

同じ宣伝キャンペーンで西日本共通語とも言うべき「がんばっとる」が使われている一方、本来この地域で使われていない京都方言の「ようおこしやす」（いらっしゃいませ）が伊賀上野商店街の菓子屋の前の看板に現れる。これらを合わせて考えると、伊賀上野は2つの優勢方言である名古屋方言と京都方言との間に挟まれながら独自の存在感を模索している姿が浮き彫りになる。

本稿と以前の論文（ロング2011a）で取り上げた8枚の「だ～こ」類の方言看板の、想定される受け手（読み手）を考えると、ほとんどは観光客だと考えて良さそうなものであるが、唯一地元人向けと思われるのは図4である。[1]地元人ではなく、よそ者に対して方言を使うのは純粋な意思疎通という点から見て矛盾しているようである。しかし、他地方の人に向けて方言看板を立てるのは、沖縄など他の地域でも観察される。日本だけではなく、世界各地でも観光客に向けてわざわざ意味が通じないと思われる少数派言語を発する動きが強まっている（ロング2011b）。

このように、あえて観光客に向けて方言をアピールする傾向は他の地域にも見られる。例えば、沖縄へ行けば観光客でも、甘い揚げパンを意味する沖縄方言「さーたーあんだぎー」という文字をよく目にする。しかし、面白いことに沖縄の人同士の間ではこの単語があまり使われないようである。筆者（ロング）が石垣島で観察した言語行動の例を挙げると、地元の人同士がこの菓子のことを「砂糖てんぷら」と呼んでいた。この「砂糖天ぷら」は文字としても現れる。筆者は沖縄に滞在中、こうした表示を2回見かけているが、両方とも観光地から離れた地元の人しか行かないような場所にあった。

[1] 厳密の意味で言語景観ではないので、本文で取り上げなかったが、2011年の春から株式会社まちづくり伊賀上野が「daco」という地元情報誌を発行している。表紙には「見慣れた風景の中にある『発見』をお届けする季刊誌。伊賀らしさ感じてだーこ♪　※だーこ（だぁこ）　伊賀弁で『～（して）頂こう、ください』の意味」と書かれている。「見慣れた風景」という語句から地元人向けという印象を受けるが、地元方言の翻訳・解説があることから他地域の人も対象にしていると思われる。

2.　外国人住民と関係する多言語景観

言語景観を考える場合、だれがだれのためにその看板や標識を立てたかが 1 つの重要な側面である。言語学的に言えば、メッセージの送り手と（想定される）受け手とはどういう人かという情報である。多くの場合、日本語以外の言語で書かれた表示の受け手は外国人であり、送り手は行政や事業主である日本人である。しかし伊賀上野では、事業主が外国人になっている場合もあるため、送り手も（受け手と同様）外国人となっているケースも見られる。以下でこの観点からデータを考察する。

2. 1. 日本人から外国人への表示

第一に考えられる多言語表記は日本人から外国人への表示である。外国人の数が増加すると、日本語ができない彼らに対する配慮として多言語表記が現れてくる。主にそれらは緊急時のための表記、外国人が良く利用する施設における表記、外国人を支援する NPO 団体などでの表記が見られる。

図 5 はカトリック教会横の多言語表示で、日本語で「自転車置場」、英語で for bicycles、そして西語・葡語の「para bicicletas」である。すなわち、スペイン語とポルトガル語で同じ言い方が用いられる。伊賀市役所で撮った図 6 は日本語と英語以外に、「lugar para bicicletas e motocicletas」と書かれている。「と」（英語の and）に当たる e はスペイン語なら y になるが、ほとんど西葡両用と言える。

図 7 は、2011 年 10 月 1 日、上野西小学校で行われた運動会で見られた多言語表示である。日本語の「みんなの笑顔は宝物」がポルトガル語でも「Sorrisode todos valeduro」と表記されている。公立の学校で多言語表示が見られるという報告は聞いたことがない。ブラジル人が集住しているため彼らの言語権が強く認められていることが分かる。

図 8 は同じ運動会に見られたもので、運動場周りの木に張られた「Favor não deixar lixo.　Não temos lixeira」である。「ゴミを残さないでください。私たちはゴミ箱を持っていません」という意味のポルトガル語標識である。こうしてマナーを促していたのは当然ブラジル人だけではなく、同じ内容の日本語バージョンもあった。

図5.　教会自転車置場の 3 言語表示

図6.　市役所駐輪場の 3 言語表示

図7. 学校運動会の 2 言語表示

図8.　学校運動会「ゴミ捨てるな」

図 9 は同小学校の門にある二言語表示（日本語とポルトガル語）であり日本語で「この運動場は上野市の規則により許可なしに使用することはできません」と書かれている。ブラジル人をはじめ、外国人は学生の 1 割を占めている学校である。

図 10 は教会前の案内板における 3 言語（日・英・ポ）表示である。[2]

[2] 手書き表示の場合、書き手は日本人か西洋人かはなんとなく検討がつく。日本人の 3 つの特徴を挙げる。(1)長い文章でも全ては大文字で書くこと（図 13）。(2)小文字の t や l などの下は真っ直ぐ伸びずに右へと撥ねるところ（図 10, 14）。(3)大文字の S に見られるヒゲをつけること（セリフ、図 15）。これらの違いは学術的研究の対象となりにくいが、一般人がよく言及する。(1)の全て大文字で書くこと（いわゆる「オール・キャップス」）について、権威ある文体手引きの Chicago Manual of Style は「スタイルの規範から逸脱したもの」としている(Idaho Observer 2003)。失礼とされることが一般的である(Vercillo 2010)。 (2) 日本と西洋においてアルファベットの手書きの教え方や規範が違う現象はインターネット上の相談サイトで取り上げられている。例えば okwave(2009)がある。(3)匿名の素人によって執筆されている Wikipedia の Regional handwriting variation（手書き文字の地域差）と題された項目にも、日本人の大文字 S の特徴に関するコメントがある

避難所など緊急時のための看板は、4 言語で表示されている。図 11 は伊賀市神戸（かんべ）の避難所 4 言語表示（日、英、スペイン語、ポルトガル語）である。外国人住民のための言語表示は小学校・教会・市役所で主にポルトガル語と限られていたが、緊急時に情報弱者になってしまう外国人に対しては配慮が見られるのである。

図9. 学校門の 2 言語表示

図10. 教会案内板の 3 言語表示

図11. 避難所の 4 言語表示

図 12 は伊賀市の中心部に当たる丸之内の観光地の案内看板である。メッセージの受け手は観光客であるため、住民のためにある日本語・ポルトガル語表示と違って、日本語と英語の二言語のみである。一方、市役所内の外国人相談窓口の表示（図 13）に

は4つの言語と6つの表記が使われている。上から日本語（平仮名、漢字、ローマ字）、ポルトガル語、中国語、スペイン語が見られる。英語が使われていないのは特筆すべきであろう。

日本語は「一般の日本語」として漢字仮名混じり文が使われている以外に、ローマ字表示による日本語も見られる。漢字に振られているルビを辿れば、平仮名表示のみでそのメッセージを読み取ることも可能である。ローマ字と平仮名（ルビ）は一種の「やさしい日本語」の試みと言える。すなわち、ここで使用されている3つの外国語以外の言語を母語とする住民のために、日本語を分かりやすくする工夫がなされているのである。

さて、伊賀上野にはペルーを中心とするスペイン語圏話者が500人ほどいる(ロング2011a)が、この5倍に当たる人数のブラジル人がいるため、言語的にはポルトガル語が優勢である。スペイン語圏人の多くはポルトガル語がある程度（程度はそれぞれだが）できるようになっているようである（これはRosa Cochanteの面接調査で得られた情報）。NPO法人の伝丸という団体は書類の翻訳、日本語や外国語講座といったサービスを提供している。その事務所の窓にあったポルトガル語の標識は興味深い（図14）。「ポルトガル語またはスペイン語からの翻訳はやっている」という内容である。「スペイン語」を現わすEspanholという単語ですらポルトガル語のつづりで記されている（スペイン語ならEspañol）。ポルトガル語とスペイン語の相対的な力関係を象徴する標識である。

図12. 観光名所の2言語表示

図13. 市役所の6種類の表示

図14. NPO のポルトガル語表示

図15. 駐車場のポルトガル語表示

2.2. 外国人から（同じ母語の）外国人への表示

次に見られるのは、外国人から外国人への多言語表示である。

伊賀上野駅近辺（伊賀市三田）にマルマス(Marumasu)というブラジル料理店兼スーパーがあった（2011 年秋閉店）。近くに、専用の駐車スペースを有しない別の店（ポルトカワバタという雑貨店）があったが、その店はマルマスの駐車場の中の 2 つのスペースを持っていた。マルマスの客に対して、これらのスペースは駐車禁止であることを伝える表示があった（図 15）。左の小さな標識は（字が色褪せたため読みにくいが）ポルトガル語で「Proibido Estacionar」（駐車禁止）、右は「Exclusivo Porto Kawabata ポルトカワバタ専用」と書かれている。マルマスの多くの客は南米人であったためこのようにポルトガル語が使用されていた。

図 16 は上野市駅近く（丸之内）にあるブラジル人経営者の食品、衣類などを販売する雑貨店である。表にポルトガル語の雑誌を並べて販売している。アルファベットばかりが目立つこれらの雑誌名や表紙に書かれた記事の見出しも、この商店街の言語景観の構成要素と言えよう（図 17）。雑誌は全てポルトガル語で書かれていて、店内の表記も全てポルトガル語であった。このような店は完全にブラジル人向けの店であり、販売商品や陳列方法など、日本とは異なる。なお、ブラジル人住民には日系人も多く含まれているので、筆者の二人（一人は白人、一人は日本人の顔）が入った際にも店員にポルトガル語で話しかけられた。

伊賀上野には経営者がブラジル人で、ほとんどの客もブラジル人であるという飲食店がある。店内部の壁に貼られたメニューには図 18 のようにポルトガル語だけで書かれているものがある。初めて来店した日本人客は戸惑うであろう。「生ビールを三杯買えば、一杯無料でもらえる」という内容である。

図16. ブラジル人経営者の雑貨店

図17. ポルトガル語の雑誌類

図18.　ポルトガル語のみの店内表示

2.3. 外国人から日本人へ（またはリンガフランカとして）の表示

外国人が日本語による表記を作る場合がある。日本で商売をする場合、外国人でも日本人に対して日本語で表記をするのは当たり前であろう。しかし、伊賀上野のような外国人集住地域の場合、外国人が日本人を主なターゲットにして商売をするよりも、外国人と日本人の両方に向けて商売をすることが多い。そのため、外国人によって作られた表示でも、日本人を意識して作ったというよりも第三国の外国人（つまり、自分と母語の異なる外国人）を想定して作った場合がある。「非日本語母語話者の送り手」によって書かれた表示が、「非日本語母語話者の受け手」によって読まれることがある。すなわち、リンガフランカとしての日本語の使用状況が存在する。そして看板によるコミュニケーションは話しことばと同様、ネイティブ不在の状況では、日本語の間違えや中間言語が生じる場合もある。総じてそれを正す母語話者がいないわけである。

伊賀市にあるブラジル系の店（レストラン、食品店、雑貨店）は、点在しており、ブラジル人街として集まっているわけではない。筆者の二人は伊賀市小田町の

Açougue do Arlyn というブラジル食品中心のスーパーへ行った。スペイン語圏やその他アジア圏の食品も販売されていた。表示はポルトガル語、英語、スペイン語など様々である。中には図 19 の「tamago」のようなローマ字表記による日本語も見られた。こうしたローマ字を使用する効果は複数考えられる。なお、店員とも話したが、その一人の使用意識を考えるよりも、表示を見た大勢の人に対する効果を考えた方が有意義だと思われる。「玉子」を意味するポルトガル語の ovo とスペイン語の huevo は少し違うが、おそらく推測できる範囲ではないかと思われる。むしろ、このスーパーには多数の言語を話す人が買い物することが関与しているのではないかと思われる。筆者がたまたま訪れている間にベトナム人研修生５，６人や中国人の客が買い物に来ていた。彼らが店員と交わしたわずかな会話も日本語だが、店内の表示に関しても、彼らが頼りにできるのはこの「tamago」のように提供されている表示以外に何もない。すなわち、ブラジル系食品店の店内表示にも伊賀上野における「リンガフランカとしての日本語」の姿が見られるのである。

図19.　ブラジル食品店のローマ字表記

図20.　外国系スーパーにおける鶏肉

図 20 は伊賀市印代にある Pátria Minha という別のブラジル系スーパーで見た「Galinha メンドリ」と書かれた鶏肉の値札である。ポルトガル語 galinha は雌鶏のことを指すことばであるが、ポルトガル語でこのように性別を明記した表示が一般的であっても日本語としては違和感を覚える。

図 21 は「スパイシー」と名付けられたレストランの入り口前にあるスタンド看板の写真である。料理人やスタッフはタイ人女性であるが、経営者と常連客のほとんどはブラジル人の男性である。この看板には外国人が書いたと思われる字が見られる。日本語なので、日本人向けに書かれたと思われるかもしれないが、しかし、この町に住む様々な外国籍の人をむすぶ唯一の共通言語となっているのは日本語なので、日本人

の読み手を想定した看板とは限らない。字の書き方も特徴的だが、「おひる はじまります」が他動詞の過去形「おひる はじめました」になっていない点も中間言語的と言える。メニューはブラジルの肉料理もあるが、ここのDセットとしてあがっているパッドガパオ（日本はむしろ「パットガパオ」という仮名表記が一般的）といったタイ料理もある。図22は同店の壁メニューに見た「assado / fritos　ヤク／カラアゲ」という興味深い表示である。以下で中間言語的な表示として分析する。

図21.　外国系店の日本語表示

図22.　外国系店の２言語表示

この店の駐車場の表示(図23)に、この町ではけっして珍しくない外国人による手書き日本語が見える。伊賀上野の多言語表示もここに見られるが、けっして東京で見るような「日本語・英語」や中部地方で見る「日本語・ポルトガル語」だけではない。図21でスタンド看板の後ろ（左上）の壁に書かれたタイ文字が見えている。そして次の図24もタイ語（プラス英語）が含まれている2言語表示である。

図23.　外国人による日本語表示

図24.　英語とタイ語の二言語表示

図25のNOMIHODAIはそのまま日本語の「飲み放題」をローマ字表記にしたものである。他の表記はポルトガル語であることを考えると、これは日本人のため、ある

いは（ブラジル人以外の）「第三国の人」のためというより、「飲み放題」がブラジル人にとって特有な概念で、変にポルトガル語に訳すよりは日本語のままで表現した方が自然だということが現れているように思われる。

図25.　ポルトガル語中心のメニュー

3.　考察

3.1. 言語景観の中間言語的側面

外国人が日本人に向けた表記の場合には、言語的に様々な興味深い点がある。ふつう外国人が日本人に向けて商売をする場合、店頭の看板や店内のメニューの日本語には何もおかしな点のない日本語が使われる。しかし、伊賀上野の場合は外国人が日本語を表記するのはもちろん日本人に対してでもあるが、必ずしも日本人に限ったことではない。多言語コミュニティーが形成される場合、リンガフランカとして日本語が使われることがある。日本に住むほとんどの外国人は、同国人同士のコミュニティーを作り、彼らの言語を使用するが、伊賀上野ではブラジルを中心に、タイ、フィリピン、ペルー、ベトナム、中国など様々な外国人が相互に交流を持っている。そのような場合に日本語が使われるのである。日本人に対して商売をする場合は、言語景観として表れる日本語が変であると、日本人には奇妙な印象を与えかねない。しかし、外国人が主な客である店では、そのようなイメージを与える心配がなく、「変な日本語」を使用することに何の不利益がないのである。表記には、ポルトガル語（もしくはスペイン語）からの母語の転移から起こる、独自の表現である場合が多い。

例えば、飲食店の壁に貼ってあったメニュー（図22）を見よう。このメニューを筆者（今村）が見たときに、何点かに違和感を覚えた。一点目はほとんどがポルトガル語で、カタカナで書かれた「ヤク」と「カラアゲ」しか読めない点である。二点目はこれらの日本語の単語のアンバランスである。「ヤク」は動詞（日本語教育で言えば「基

本形」や「辞書の形」）であるが、「カラアゲ」は名詞で料理名である。唐揚げを注文しようとしたところで、この意味が違うことが分かった。これは筆者が想像していた鶏の唐揚げではなく、魚の料理法である。つまり、上に記されている peixe は「魚」であり 1000 円であることを示している。その下に表示されているポルトガル語の assado / fritos は魚の料理法で、日本語のヤク／カラアゲはその訳として載っている。

確かに、鶏以外にも魚などの料理にも使われることが分かる。[3]「カラアゲ」は専門家の間でも「揚げ油を使用した調理方法、またその調理された料理のこと」と定義付けられている（日本唐揚協会 2011）ので、このメニューのような「カラアゲ」の使い方は間違った日本語とは言えない。しかし、一般的なネイティブが「カラアゲ」を見て、思い浮かぶのは調理法というよりは、調理された料理そのもの、しかも鶏肉だと言って良さそうである。

しかし、最も特徴的な日本語の使い方が店主の話しことばに見られた。筆者らが、魚を注文したら、「カラアゲで食べるか？ヤクで食べるか？」と聞き返された。つまり、伊賀上野在住のブラジル人やタイ人（の少なくても一部）の住民の間で「ヤク」は活用される動詞ではなく、名詞として使われているのである。図 25 の frango（鶏肉）の料理法の選択としても「カラアゲ／ヤク　frita／assado」が挙げられている。

図 20 で見た「メンドリ」という表記について考えよう。商品は確かに雌の鶏だろうから日本語として間違っているとは言えない。しかし、日本語でメンドリと言うと生きた鶏を指すことが一般的であるように思われる。食用の場合は、「丸鶏」などと言うだろう。ここに書かれている「メンドリ」はむしろポルトガル語の galinha を日本語に直訳したものだと考えられる。

以上のように、外国人が主に外国人に対して商売をする場合、日本語が不自然であってもそれが通ってしまうため、中間言語的な表記が見られる。このような表記はその他のブラジル人集住地域でみられるかどうは今後の調査課題である。

3.2. トップダウン型とボトムアップ型の言語景観

本稿では、看板の書き手と（想定される）読み手は日本人か外国人かということで分類を試みた。この区別を言語学的な立場から言えば、例えばポルトガル語と日本語の二言語表示の場合、どちらの言語を母語として書き、どちらの言語を第二言語として書いたのかという違いである。一方、Backhaus(2007)は同じような情報を少し違う

[3] 例えば、小笠原諸島の名物料理に「穴タコの唐揚げ」や「あかば（アカハタ）の唐揚げ」がある。

観点から捉えている。すなわち、行政によるトップダウン型と、地域住民が作成したボトムアップ型の二種類に分けている。トップダウン型の表示は言語サービスの研究（河原 2004）との関連が深く（バックハウス 2009、井上 2009、Shohamy, et al. 2010）、ボトムアップ型は少数民族のアイデンティティ研究との関係が深い（ロング 2010b & 2011b、Taylor-Leecha 2012）。

以上、従来の言語景観論で用いられた変数の一つである「トップダウン型・ボトムアップ型」の分類を伊賀上野のデータに当てはめてみた。それは、特定な研究分野において一般に採用されている理論や概念を特別な理由がない限りは継続したほうが望ましいと思われるからである。図1, 2, 3, 4, 6, 9, 11, 12, 13 をトップダウン型、図5, 7, 8, 10, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25 をボトムアップ型と分類できる。しかし、この二者択一的な分類よりも、我々が２節で利用した３対立（日本人から外国人への表示、外国人から外国人への表示、外国人から日本人への表示）の分類のほうが伊賀上野の社会言語的状況を解く要因として有効であるという結論に至った。

3.3. 他地域との社会言語的環境の比較

本稿の目的は伊賀上野の可視的言語である言語景観が、地域住民の置かれている言語環境にどのように関与しているかを考えることにある。しかし、伊賀上野の特色を考えるために、一歩離れて他地域から眺めてみる必要があると言えよう。

地域住民が日ごろ目にする言語は彼らが暮らしている言語環境を形成している一要因である。使用される言語や文字によって印象が変わる。日本人観光客は中国に行くと漢字に囲まれるためある程度の安心感を覚えるが、韓国では街中の看板がハングルで書かれているため落ち着かないと言う人がいる。太平洋戦争中、日本軍に制圧されたアジアや太平洋地域の町では、一夜にして日本語の表示が増えたことで、住民は侵略された実態を自覚したという（張 2012）。一方、戦時中の米国では、敵国日本の言語が禁止された。収容所の中ですら日本語の表示が禁止されたため、日系人はこの言語景観の激変に圧迫感を感じたという（水野 2003）。裏を返せば、白人住民は日本語の言語景観を抹消しなければ気が済まないほど恐怖に怯えていたのかもしれない。

日本国内に暮らす外国人住民は、居住地域で母国語が使われるかどうかによって言語環境が大きく違ってくる。内容に関わらず自分たちの言語を目にすることによって生活する地域への印象が変わってくるはずである。

しかし、日本に住む外国人住民に対する言語景観には、マイナスイメージを与えるものがよく見られる。バックハウス(Backhaus 2007:127)の調査に含まれていた東京の中

国語表示 62 件のうち、49 件は禁止や警告に当たる類である。また、塚原・今村・石坂（2010）によると、横田基地周辺の商店街の英語表記にも禁止表示が多いという。表向きには、米軍との友好関係を維持し、異国情緒を観光資源としている地域でさえ、実際の言語景観にはそのような表記が多くみられるのである。庄司（2009:39）も「外国人にむけた犯罪や監視の警告、商店などの来客拒否のメッセージが少ないながらも外国語で表示される現実がある」と指摘している。井上（2000:17）も指摘するように、一般の人はこのような言語景観を見て、悪いことをするのは見慣れない文字を使う人だという偏見をもつかもしれないであろう。

なお、関東や関西を中心に調査を行なっているこれらの研究と違って、寺尾（2009）の対象地域は、ブラジル人が多く住む岐阜県の地方都市であるため伊賀上野の状況により近い。彼は駅構内にあった音楽・ダンス禁止警告表示の日本語版よりもポルトガル語版が「より目を引きやすい構成となっている」点を指摘した上で、「立ち寄った第三者に『この町では住民が特定の外国人の出す騒音に苦慮しているのか』との印象を与えかねない」という問題を指摘している(2009:31)。実は寺尾が取り上げている 16 枚の看板の中に「ブラジル人を無用に不快にさせる可能性がある」物は 3 枚もあるという（同上、35 頁）。

これに比べて伊賀上野にはこうした外国人住民を取り分け悪者扱いする類の表示は極めて少ない。これまで筆者が現地調査を行なっている回数も日数も少ないが（ロングは 10 回で計 18 日間、今村は 3 回で 5 日間）、それでも写真に収めている多言語表示（標準語と方言の物を含めて）は 130 枚に上る。その内、上記のように、外国人住民を悪者扱いすることで、不快感を与えそうなものはこれまで 1 枚しか存在しない（ロング 2011a で取り上げている）。これまで筆者の聞き取り調査でも外国人住民はおおむね伊賀上野を「住みよい町」として前向きに評価している。一方、日本人住民からも「外国人が増えて困っている」という話は聞かない。それどころか、外国人が住み着くことによって地域経済が成り立っているという肯定的な意見の方がよく聞かれる。文化摩擦はもちろん皆無ではないので、今後稿を改めて取り上げたいが、少なくても現段階で言えることは、他の地域で見られるようなマイナスイメージの言語景観が伊賀上野にはほとんど見当たらないということである。

謝辞

この調査研究は「都市の地域中心性と敬語行動　―第二次伊賀上野調査を中心に―」と題した富山大学の中井精一研究代表の文部科学省科学研究費（基盤 B）の助成

で行われたものである。本研究に協力してくださった川江猛氏、ロサ・オチャンテ氏、カルロス・オチャンテ氏、ファビオ・スギ氏に御礼申し上げます。

参考文献

井上史雄 (2000)『日本語の値段』大修館

井上史雄 (2009)「経済言語学からみた言語景観」庄司他 53-78

河原俊昭編 (2004)『自治体の言語サービス　―多言語社会への扉をひらく』春風社

庄司博史、P.バックハウス、F.クルマス編 (2009)『日本の言語景観』三元社

張守祥(2012)『満洲国地域における日本語の言語景観　―写真史料からみる日本語普及史―』首都大学東京博士論文

田中ゆかり (2007)「東京圏言語的多様性―東京圏デパート言語景観調査から―」『社会言語科学』10.1: 5-17

塚原佑紀・今村圭介・石坂真央（2010）「言語景観から見える米軍基地と地域社会の関わり―横須賀市と福生市を例に―」『社会言語科学会第 25 回大会発表予稿集』194-197

寺尾智史 (2009)「地方都市における多言語表示 : 美濃加茂市における南米出身者向け表示を事例として」『神戸大学留学生センター紀要』15:25-49

中井精一、ダニエル・ロング編(2011)『世界の言語景観　日本語の言語景観』桂書房

中井精一、東和明、ダニエル・ロング編 (2009)『南大東島の人と自然』南方新社

日本唐揚協会 (2011)「唐揚げとは」 http://karaage.ne.jp/whats/2011/01/karaage-teigi.html）

水野剛也 (2003)「日系アメリカ人仮収容所における日本語の禁止　第二次世界大戦時のアメリカ連邦政府による『敵国語』政策の一側面」『メディア史研究』15 : 126-146

バックハウス、ペート (2009)「日本の言語景観の行政的背景　―東京を事例にして―」庄司博史他編 145-170

ロング、ダニエル (2009) 「南大東島ことばが作り上げる言語景観」中井他編(2009) 74-87

ロング、ダニエル (2010a) 「奄美ことばの言語景観」内山純蔵、中井精一、中村大編『東アジア内海の環境と文化（日本海総合研究プロジェクト報告５）』　桂書房 174-200

ロング、ダニエル (2010b)「琉球語使用地域の言語景観から読み取るアイデンティティ」2010 年度言語景観研究日米韓中国際会議（明海大学 11 月 28 日）にて口頭発表

ロング、ダニエル (2011a) 「伊賀上野の外国人住民コミュニティの言語生活環境—参与観察調査からの中間報告—」『人文学報』443: 1-19

ロング、ダニエル (2011b) 「世界の少数派言語の言語景観に見られるアイデンティティの主張」中井他編 3-12

Backhaus, Peter (2007) *Linguistic Landscapes: A Comparitive Study of Urban Multilingualism in Tokyo*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.

Idaho Observer (2003) "Are we flesh and blood or a legal fiction?" *Idaho Observer* May 07http://proliberty.com/observer/20030507.htm

Landry, Rodrigue & Richard Y. Bourhis (1997) "Linguistic Landscape and ethnolinguistic vitality." *Journal of Language and Social Psychology* 16.1:23-49.

okwave (2009)「手書きの小文字 i の書き方」http://okwave.jp/qa/q5346206.html

Shohamy, Elana, Eliezer Ben-Rafael, Monica Barni, ed.(2010) *Linguistic Landscape in the City*. Bristol, UK: Multilingual Matters.

Taylor-Leecha, Kerry Jane (2012) "Language choice as an index of identity: linguistic landscape in Dili, Timor-Leste" *International Journal of Multilingualism* 9.1: 15-34

Vercillo, Kathryn (2010) "What People Think When You Type in All Caps" http://kathrynvercillo.hubpages.com/hub/What-People-Think-When-You-Type-in-All-Caps

（Daniel Long・首都大学東京教授）

（いまむら　けいすけ・首都大学東京大学院博士後期課程）